

老熟家族



佐江衆一

新潮社

老熟家族



佐江衆一

新潮社

老熟家族

定価 一〇〇〇円

昭和六十年六月五日発行
昭和六十年十月十五日四刷

著者 佐江 衆一
さえ しゅういち

発行者 佐藤 亮一
さとう りょういち

発行所 株式会社 新潮社



東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京(266)五二二一(業務)
東京(266)五四二一(編集)
振替 東京 四八〇八 千一六二

印刷 大日本印刷株式会社
製本 大日製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Shūichi Sae, Printed in Japan, 1985

ISBN4-10-309005-7 C0093

老
熟
家
族

第一章

1

八十三歳の母親が殺された朝、息子の森本代志男は、休日の朝のジョギングをしていた。梅雨明けの太陽が鮮烈に射す朝で、日本列島のなかばを覆っていた陰鬱な雨雲は北上し、住宅地の高みに天がぬけたような真夏の青空がひろがった。降りつづいた雨に濡れた、新築して間もない家の屋根が色彩ゆたかにきらめき、住宅地をかこむように残る丘陵の雑木林と庭木の緑がひときわまぶしかった。

森本代志男は筋肉質の体軀の持主で、遠目には年齢より若く見える。白線のはいった紺のジョギング・パンツに揃いのシャツを着た彼が、けっこう軽快な足どりで住宅地内を走っていた姿を、この日も幾人かの主婦が見ていた。

「……ええ、そうですね。テレビ画面の時刻を見ましたので、七時四十分だったと覚えています」

と隣家の若い主婦は話した。「台所の窓からふと見ると、森本さんのご主人がいつものジョギング・スタイルで、向うのあの坂をかけおりてくる所でした。日曜日の朝はもっと遅い時間にお天気だとたいてい走ってますけど、土曜日の朝もときどきお見かけしますのよ。今朝は高校に出かけてゆく制服姿のお嬢さんと坂の途中ですれちがって、こまで声はきこえませんが、二言三言なにか声をかけあいながら手を振りあっていましたわ。昨夜は雷も鳴るあのひどい降りで、それが嘘みたいにあがって真夏の光がきらめく朝でしたから、よけいにおふたりの姿がまぶしい感じで、羨ましいと思って見ていましたの……。それなのに刑事さん、あの時間に森本さんのお宅で、あんな怖いことが起っていたなんて……」

また近所の年配の主婦は、取材の新聞記者にこう語っている。

「羨ましいご家族でしたわ。亡くなられたおばあちゃんやまは寝たきりのご様子で、最近はお見かけしませんけど、おじいちゃんやまはあのお歳なのにお丈夫なかで、おばあちゃんやまの看病を付きつきりでなさっていたみたいね。それは仲の良いお年寄り夫婦で、おばあちゃんやまがお元気なころは、といつてもお歳でしたから目がかなりご不自由で、おじいちゃんやまのほうも耳がご不自由でしたけど、おふたりが二人三脚みたいに助けあって、杖にすがって仲よくお散歩なさっていましたわ。それに、お嫁さんの森本さんの奥さまがたいそう出来たかたで、おふたりの面倒をよくみていらつしやったわね。傍目にはよそさまのご家庭の内情はよくわかりませんが、いっしょにお住みになりながら舅姑とのいざこざなどはなかったみたいね。うちなんかおばあちゃんが亡くなったからおじいちゃんが急にボケてしまつて、入院させてほつとしてますけど、でもやっぱり、おたが

い辛い厭なことがあっても、森本さんのお宅のようにいつしよに暮せるのがお年寄りにはいちばん幸せなのよ。森本さんではお年寄り夫婦が離れに住んでいて、ほら、よくいうじゃないの、老人との同居は「スープのさめない距離」が理想だって。つい先だってでもスーパーに買物にいかれる森本さんのおじいちゃまに道でお会いしたら、『息子の家で長生きして死ねるのだから、わしら果報者だ』とおっしゃっていましたのよ。それなのにあのおじいちゃまが、ご自分の手でおばあちゃまを殺しただなんて……。それも首を絞めてなんでございましょう？……なぜですの？とても信じられませんか。いえ、信じたくないわね」

事件のあった日、気象庁は例年より二日早い関東地方の梅雨明けを宣言した。翌七月十五日、日曜日の神奈川新聞は、海水浴客でにぎわう湘南海岸の写真をかかげた社会面のトップに、五段ぬきの大見出しで次のように事件を報じた。

十四日午前十時二十分ごろ、横浜市戸塚区南郷台ニュータウン二ノ四三九、会社員森本代志男さん（五）から「寝たきりのおばあちゃんが死んでいるのを、おじいちゃんが見つけたが、様子がおかしい」と戸塚署に届けがあった。

同署で調べたところ、離れ六畳間の寢床で、代志男さんの母タツさん（八）が右耳から血を流して死んでいた。両目にいつ血点があるなど不審な点が多く、同署で司法解剖した。同日昼すぎ代志男さん夫婦が父親の亮作（八）を問いつめたところ、亮作が自分の顔を指さして泣き出したため、家族が同署に連絡。同署員が亮作を任意同行し追及したところ、犯行を認めたため同夜逮捕した。

自供によると、亮作は十三日午後十時ごろ、自宅離れ六畳間で寝ていた妻のタツさんが「体がかゆい」などとむずかり、タツさんの体をかいてやっていた。しかし、タツさんがさらに暴れるため、手足を押えついたりしているうち、手で首を絞めたという。

その後、おなじ布団で朝まで添寝したが、十四日午前六時ごろ、タツさんが冷たくなっているのに気づき、同七時半すぎ、嫁の律子さん(妻)に知らせた。

亮作夫婦と代志男さん夫婦は、同敷地内の母屋と離れに別々に住んでおり、事件当夜、代志男さんは会社の残業で午前二時すぎに帰宅したため、犯行時には留守だった。

森本さん一家は五年前、マイホームを新築し東京から移ってきたが、そのとき亮作夫婦も郷里群馬県から呼ばれて離れに同居した。同ニュータウンは最近住宅が建ちならんだ新興住宅地で、周りには雑木林の丘陵が残り、畑や田圃も点在し、農村の面影をまだとどめているところ。

タツさんは昨年からはほとんど寝たきりで、同署は、亮作がタツさんの体を押えているうち、看病疲れや老齢のことなどを考え、発作的に首を絞めたとみている。亮作は高齢でかなり耳が遠い上、事件後は痴呆状態がひどく、取調べの係官に「死にたい、死にたい」と、もつれる舌で繰り返しているという。

2

事件の当日、十四日午前十時二十分に一一〇番の第一報をうけて、戸塚署刑事課第一係、田上

警部補らが現場に急行したとき、土曜日の午前中の住宅地は、頭上たかく昇った梅雨明けの太陽にじりじり照りつけられてひっそりとしていた。新しい瀟洒な住宅が建ちならぶなだらかな坂道のポプラ並木の葉が風にそよぎ、丘陵の雑木林では小綬鶏が真夏の光と風の訪れをはしゃぐように声高くさえずっていた。先導のパトカーがサイレンを鳴らしながら左折すると、三ブロックほどいった、東と南に幅五メートルほどの道路の角地に、森本家はあった。

西に傾斜する住宅地のほぼ中央で、東の高台になお住宅が建ちならんでいるが、森本家は淡いクリーム色のモルタル造りの二階家で、近所より敷地がひとまわり広く、贅沢なマイホームである。いまだにマイホームが建てられずに戸塚区内の県営団地アパートにいる田上刑事には、羨ましい環境だった。

森本家も息を殺したように静かだったが、パトカーから先におりた若い警察官が門柱にとりつけられているインターホンのブザーを押すのもどかしく門扉をあけようすると、突然、犬が吠えた。車の置かれていないカーポートの脇に犬小屋があり、鎖につながれた白い犬が吠えたてゐる。中型の日本犬だが、純血種ではなかった。犬の好きな田上刑事がよしよしと声をかけたが、見知らぬ数人の男たちに興奮した犬は、いっそう猛りたって吠えたてゐる。そのとき玄関のドアが細めにあき、男が顔をのぞかせた。

「ご苦労さまです。お手数をかけてすみません」

玄関ポーチに出てきた男は近所を憚る低声でいい、それから犬をたしなめた。

「森本代志男さんだね」

田上刑事が質すと、そうですといい、血走った目を伏せた。もみあげに白髪のまじる、薄くな
りかけた頭髮が乱れ、土気色の疲れきった顔色をしている。

ドアの脇に華道教授の看板がさがっており、玄関ホールに中年の女が立っていた。この家の主
婦で、森本律子だった。彼女も顔に血の気がなかったが、まっすぐに田上へ視線をむけていった。
「あちらの離れですが、こちらからお上がり下さい」

極度に緊張していたが、玄関に入ってきた刑事と制服警官に臆するふうもなかったというのが、
森本律子にたいする田上刑事の第一印象である。

白い百合の花が活けられている、吹き抜けの玄関ホールから二階への階段があり、左手のドア
をあけて通された部屋は、リビング・ルームと応接間をかねているらしい十五畳ほどのカーペッ
ト敷きの広い洋間で、インド風の透し彫りの衝立をはさんで左右に別々のソファ・セットが置
かれ、南側のしめきられているガラス戸にレースのカーテンが引かれていた。手入れのゆきとど
いた庭の緑の芝生と花壇のサルビアの真紅の花がカーテン越しにまぶしく、冷房のきいている室
内が薄暗いせいか、空気がいっそう冷えびえと感じられた。

テレビのまえのソファに、灰色の開襟シャツを着た老人が背をまるめて腰をおろしていた。
「おじいちゃん、警察のかたよ」

森本律子が老人の薄い肩に手をふれていった。

「第一発見者の森本亮作さんだね」

田上は質したが、老人は首をまわしてうつろな目で見あげただけだった。

「警察のかたが来て下さったのよ」

「……………」

「ケ、イ、サ、ツ……」

一語一語区切って、律子は老人の耳もとで繰り返した。亮作は皺深い顔を小刻みにふるわせてわずかにうなずき、怯えた目で田上たちを見まわしたが、立ちあがろうとはしなかった。

「おばあちゃんがこんなことになったのですから、今朝はボケがひどくて……」

「ま、そつとしておきましよう。ホトケさんはどちらです？」

後に立っていた森本代志男が、こちらです、といった。

西側の隣室が八畳ほどのダイニング・ルームで、中央にテーブルがあり、西側の出窓にそつて、きれいに磨かれたクリーム色のキッチン・セットがならんでいる。南側のガラス戸をあけると、一間ほどのテラスをはさんで、屋根つきの渡り廊下で離れとつながっていた。

テラスには車椅子が置かれており、渡り廊下から離れの引戸をあけると、板の間の右が三尺四方の三和土で、西側のドアからも出入りできる離れの玄関である。板の間の奥にトイレと狭いながらも台所、そして浴室もあるらしい。よく出来た設計だと田上は感心した。

「このドアのほうも、鑑識さん、頼むよ」

離れの玄関のドアをあけて、隣家との境のブロック塀ぞいの狭い路地をのぞいた若い吉川刑事が、渡り廊下の引戸を調べている鑑識の係官に声をかけた。

襖をひらき部屋にふみこんだとき、ひんやりとした空気がにおった。冷房特有のにおいではな

かった。部屋中にしみついている老夫婦の澁んだような暮しのにおいにまじって、線香の香りがかすかに漂っていた。

その六畳間の壁に片寄せて敷かれている寢床に、森本タツは寝かされていた。顔を白布で覆われ、首もとまで薄い夏掛け布団がかけられているが、布団のよりあがり、子どもが寝かされているように見えた。田上は白手袋のまま合掌し、白布をとりのぞいた。

頬骨のとびでた、瘡せ衰えた老婆の顔が、やはりレースのカーテンが引かれているガラス戸からの、淡い夏のひかりにさらされた。乏しい白髪がにぶくひかり、クーラーの風にわずかにゆれている。皺のあつまりのような薄い唇の端がややめくれ、入歯の白い前歯がのぞいていたが、苦悶の表情というより、微笑をうかべているように見えた。唇にうすく紅がさされているせいで、老婆がほほえんでいるように見えるのかもしれないが、安らかな死顔である。

殺人ではないな……。田上は直感した。

しかし、右の耳に、糸を引いたような血の跡がこびりついていた。検視官が田上に目顔で知らせ首をふり、ホトケの臉を指先でおしひらいて目のなかを調べた。一瞬、死者の老婆の目がこの世を見、落ちくぼんだ眼窩の奥で、ふたたび皺深い臉にとざされた。検視官は瘡せ細った老婆の首も調べ、掛け布団をめくって胸のあたりも調べた。こざっぱりとした浴衣を着せられていたが、わずかに臭気が漂った。床ずれの壞疽の臭いである。

布団をかけられると老婆は、いやいやをして眠ったふりをする童女のような死顔にもどった。東は庭に面して一間の出窓、南は濡れ縁のある二間のガラス戸でブロック塀が鼻先にあるが、

南側が道路なので冬でも日当りはいいだろう。ブロック塀にそってつくられている植木棚に、山草らしい鉢がぎっしりならんでいる。

部屋の北に押入れと床の間、床の間にテレビと電話機もあるが、新しいこの部屋にそぐわない、かなり古い立派な仏壇が置かれ、大小数体の位牌が肩を寄せあうように安置されている。線香立てに、灰となって崩れた線香のとなりで小さくなった線香が、燃えつきようとして一筋の煙をあげていた。森本亮作が老妻の死を、冥土の死者たちへ報告したのだろうか。

田上は、鴨居の壁にならんできかけられている写真の額にも気づいた。亮作がうけた表彰状などの額も飾られているが、紋付姿の老夫婦のすっかり赤茶けた写真のとなりに、陸軍上等兵の軍服姿と航空兵姿の二人の青年の写真がかかげられている。顔だちのよく似た二人の青年兵士が緊張した涼やかな目で、老婆の遺体と田上たちを見おろしていた。

室内に物色したあとはなかった。壁によせて使い古した姫鏡台と小机、小机の上に天眼鏡ときちんと折りたたんだ新聞、布巾をかけた吸吞と薬袋がのせられ、掃除もゆきとどき、几帳面な老夫婦の質素な生活がうかがえる。古ぼけた西洋人形が脚を投げだして坐らされているテレビの上に、新しい部厚い聖書が置かれているのは、仏壇のあるこの部屋には奇異な感じだが、最近、老夫婦のどちらかが聖書をひもといっていたのだろうか。

いつ入ってきたのか、部屋の隅に森本亮作が突っ立っていた。さっきは小柄な老人だと思ったが、背がまるまわっていても上背のある、骨太な老人である。

口もとをふるわせ、なにかいいかけるそぶりを見せたが、

「おじいちゃんは、あちらにいて下さいな」

嫁の律子にいわれ、肩を抱かれて亮作が出ていくと、入れかわりに老医師が入ってきた。急患があつたので医院にもどつていたが、とまだ息を切らしながら田上たちに挨拶した医師は、以前一度だけだが、風邪をこじらせた田上を診察したことを思い出し、田上のほうもその節はどうもといった。

「タツさんがこちらに越してこられてから、私が診ておりまして……」

鼻下に白髪のひげをたくわえた近藤医師は、今朝診たときの状態を手短かに話した。

「ご苦労さまです。詳しいことはあちらの部屋でうかがいますから」

立ちあがろうとして田上は、ホトケの枕元の畳が濡れてしみになっているのに気づいた。日焼けしてやや黄ばんだ畳が乾ききらずに濡れている。手で触れてみると、掌に吸いつくように畳の湿り気が感じられた。昨夜、枕元にあつた水差しでも倒したものか、それともタツの失禁のあとだろうか。

近藤医師と代志男夫婦に母屋へ引きとってもらい、鑑識の係官が現場写真をとっているあいだ、田上は南側の濡れ縁に出て植木棚の山草の鉢を眺めた。両の掌に入るほどの素焼きの鉢に、何という山草か薄桃色の可憐な花が咲き乱れている。梅雨のうちに咲きはじめたらしいが、今朝の陽をあびて蕾がひらいたばかりの花もあるようだ。

「こちらの木戸から離れに自由に出入りできるんですね」

ブロック塀の高さを巻尺で測っていた吉川刑事が、手帳の見取図に書きこみながらいった。南

側の道路に面したブロック塀の西の端に木製の開き戸がついている。

「このブロック塀なら乗り越えるのも造作ないだろう」

「ええ、道路から部屋のなかが覗きこめますし」

「吉川君、君はこの山草の名前を知っているかい？」

と田上はきいた。

「知りませんね。ただの雑草じゃないんですか？」

「歴とした名があるんだよ。こっちのは『ひとり静』^{しずか}というんだ。春先にこの葉のあいだから、なんとすることはない小さな穂のような白い花がひとつだけ咲いてね。『ふたり静』というものもあるんだが……」

「詳しいんですね」

「ちかごろ興味をもつてね。デパートの山草展なんかをのぞいているんだが、なかなか名前を覚えられなくて……」

「田上さんもお歳じゃないんですか？」

「こんなにくくさんの山草を、ホトケが丹精こめて育てていたのかな」

「ひとり静」か……口のなかでそつとところがすように、田上はつぶやいた。

「外部の者の殺人^{ころし}ですね」

山草などに興味のない吉川がいった。

「扼殺^{ひち}のような。解剖^{ひち}いてみればはつきりすることだが……」

名前のわからぬ、薄桃色の小さな花が咲き乱れる山草の鉢に視線をもどしながら、田上刑事もこのとき、外部の者の犯行を考えていたのである。

「今朝、おじいちゃんが気づいたんだね？ 何時ごろでした？」

母屋の居間のソファで、田上は森本亮作に訊ねた。八十七歳の老人は小刻みに首を痙攣させながら、怪訝な表情で田上を見た。律子が老人の耳からイヤホンがはずれているのに気づき、さしこんでやり、胸ポケットに入れてある補聴器の本体をとりだし、マイクのように田上にさしむけた。

「何時ごろ、おばあちゃんが亡くなっているのに気づきました？」

田上はゆっくりと訊きなおした。

「……………」

焦点のぼやけた老人の視線が、手さぐりでもするように田上にむけられている。

「おばあちゃんがおかしいと気づいたのは、何時ごろだったの、おじいちゃん？」

律子が幼い子へ訊ねるように繰り返し返した。

「……………あれは……七時半すぎだよ」

「それはわたしに知らせた時間でしょ。さっきはわたしに六時まえだといったわね。今朝は何時ごろ目を覚ましたの？」

わたしの声はよくききとれるんです、と律子は田上にいい、亮作の肩に手をおいた。